様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：４２２０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０２７８

研究課題名（和文）出土状況・セット関係にみる縄文時代中期の儀礼行為に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Jomon rituals from viewpoint of exhumation situation and assemblage

研究代表者
中村　耕作（NAKAMURA, Kousaku）

國學院大學栃木短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：３０５４８３９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：関東地方、縄文時代中期における儀礼的要素、特に屋内倒置土器と人骨の残る廃屋墓を中心に、広範な事例集成と、良好な発掘調査事例の検討を行い、竪穴住居の廃絶後の様々な段階で、多様な儀礼行為が行われたことを明らかにした。従来、竪穴住居に関わる儀礼行為の研究は中部地方を中心に行われていたが、関東全域を検討することで、共通性とともに地域差・時期差を確認できた。

研究成果の概要（英文）：I collected the example of the pit dwelling with the human bone or pots that were discovered in reverse in the middle of Jomon period of the Kanto district. In addition, I examined a certain example of the substantial investigation record in detail. As a result, I made clear that a variety of courtesy was performed at various stages after a house was abolished.

研究分野：考古学

キーワード：廃屋墓　倒置土器　祭祀　住居廃絶　竪穴住居　葬送墓制

１．研究開始当初の背景

縄文時代中期には、土偶・石棒をはじめ、釣手土器、有孔鍔付土器などの特殊器種、石壇・石柱・埋甕などの特殊な屋内施設など儀礼に用いられる様々な道具・施設が使われた。このことは、既に多くの研究で明らかになっているが、これらは主として長野県～東京都の山地における事例を検討したものであり、平野部での状況が不明であったこと、個別の研究は進んでいたものの、相互の関係性については不明瞭であったこと、という課題が残されていた。また、同時期の千葉県の貝塚地帯では屋内への埋葬事例（「廃屋墓」）が知られていたが、人骨が遺存しない地域においての、葬送儀礼と、上記の各種儀礼具・施設との関係性も十分検討されていなかった。

研究代表者は、これらの一部である釣手土器やパン状炭化物の研究の中で、屋内埋葬に伴う儀礼的供献の可能性を検討したが、個別の検討に留まっており、関東～中部の広範囲にわたる全体的な視点からの相互関係の研究が不可欠な状況であった。

２．研究の目的

（１）儀礼関係諸資料の地域的・時期的消長

分析の前提として、諸資料がどのような分布を持つのかを明らかにする。例えば、申請者の研究では初期の釣手土器は八ヶ岳南麓の限られた地域にしか存在しないことが、それと重なる資料が存在すれば、何らかの関連の可能性が高いものとして、優先的にその関係を分析可能である。

（２）儀礼関係諸資料の具体的セット関係の有無とその変化

具体的セットとは、個々の竪穴住居における各資料のセット関係である。従来、地域や遺跡をまとめて、有無を一覧表にする先行研究はあるが、それらが集中ないし解消する画期を明らかにできるものの、個々の竪穴での具体的な行為での関係を明らかにするものではない。

（３）遺跡内・遺跡間・地域間における儀礼関係諸資料の分布・その重なりの有無、その変異

（２）は個々の竪穴住居の検討であったが、同じ遺跡の同時期の竪穴間において、儀礼関係諸資料の分布や、セット関係に差異が生じる可能性がある。つまり、特定のイエのみで特定の儀礼が行われた可能性である。また、申請者の釣手土器の研究では、釣手土器を多数持つ遺跡と１例ないし皆無の遺跡、あるいは多数持つ地域と少ない地域の存在が明らかになったが、こうした事象の他の資料との関係性を検討する必要がある。こうした分析は、1960 年代～70 年代の資料が少なかった時期には、この地域においても実施されていたが、大規模な発掘調査で資料が増加した現在改めて検討が必要である。

（４）儀礼行為の順序・変異の復元

以上の分析を通じて、儀礼関係諸資料のセット関係の一端が明らかになるものと想定される。これらの諸資料を、出土位置の検討を通じて、時間軸上に並べることで、儀礼において用いられた順序を復元することが可能である。また、時期・地域・遺跡・住居の間で、一部の行為の省略や道具の転換が行われた可能性を復元することが可能である。

３．研究の方法

（１）資料の集成・データベース化と解析

発掘調査報告書をもとに、資料の出土状況について、道具（土偶・石棒・土鈴・釣手土器・有孔鍔付土器・器台・壺・石皿・磨石・丸石・石鏃・打製石斧・磨製石斧・黒曜石剥片など）、設備（石壇、石柱、立石、入口部埋甕、床下倒置埋設土器など）、行為（土器・石器等の倒置、火入れ、炉石の抜き取りなど）などをデータベース化し、住居床面、住居覆土などの単位でどのようなものがセット関係にあるのかを確認する。

（２）コンテクストの解読・現地調査・検討会

上記のデータベース化は全体像を把握するためのものであり、これらとは別に、良好な事例については住居の構築から廃絶後までの各段階における道具のセット関係・配置状況などを詳細にあとづける。必要に応じて現地調査・検討会を実施する。

４．研究成果

本研究の特徴は、①徹底した資料集成をもとに、統一した視点で全体を把握する点、②竪穴単位でのコンテクストを重視して具体的な関係性の分析を行う点、③コンテクスト解読と統計解析を併用する点が挙げられた。当初は、総合的なデータベースを作成して多角的な分析を行う計画であったが、資料の量とコンテクストが予想以上に多量・複雑であり、研究の中心を、廃屋墓との関係性が高い、屋内倒置土器をめぐる諸事例に絞り込んで、上記３点の立場から分析を行った。

集成・分析の最終的な結果については、現在論文としてとりまとめている最中であるが、学会発表や短い論考として発表したものや、一般向け講演として提起したものの概要をまとめると以下の通りである。

（１）廃屋墓における基礎的事象の整理

本研究での重要な検証課題であった儀礼具・儀礼施設と屋内埋葬との関係性を検討する前提として、人骨の遺存する屋内埋葬事例である千葉県を中心とした廃屋墓における基礎的事象を整理した。時期・地域的な分布や男女差の特徴、装身具・副葬品の有無、埋葬姿勢などの従来分析されてきた項目に加え、遺体配置部分の整地、土器・貝・ローム

質土の被覆、イノシシ下顎骨の供献、焚火など様々な行為が行われていたことが明らかになった。これらは一連の過程ではなく、多くの事例から抜き出したもので、個々の事例数は多くはない。また、山地で注目されてきた特殊な土器や石棒などの共伴例はみられなかった。従って、廃屋墓の習俗が山地まで分布していた可能性は検証不可能であるが、一方で、それぞれの地域において様々な儀礼行為が行われていた可能性を改めて提起することができた（『日本文化研究』1）。

また、これらの事象は床面直上だけでなく、床面の掘り込み、覆土の中層、覆土から床面への掘り込み、覆土上層など、竪穴廃絶あら埋没に至る様々なタイミングで実施されていた。廃屋墓以外のデータ集成は床面に限って実施したが、将来的には覆土を含め、竪穴の構築から廃絶直後、さらに埋没に至る各段階での儀礼行為の検討が必要となる。

（２）墓坑内倒置土器における土器様式の差

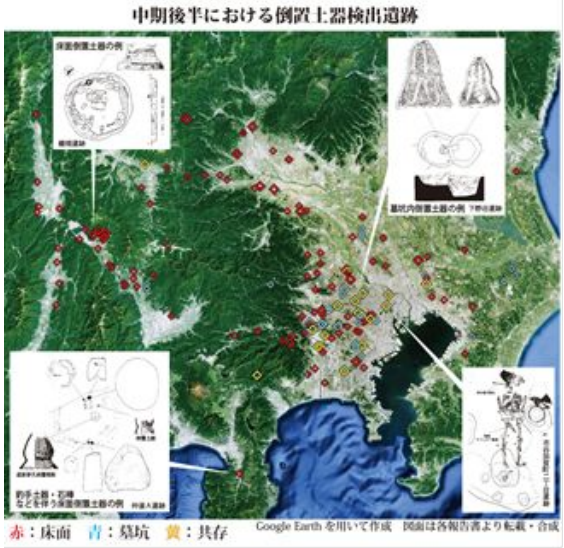
廃屋墓や環状集落中央墓群において、しばしば倒置土器が検出されており、人骨が遺存しない山地部の床面倒置土器も廃屋墓に関わる可能性が山本暉久氏によって提起されていた。そこで、屋内倒置土器の分析の前段階として、墓坑内倒置土器の集成を行い、関東～中部全域での出土と、武蔵野台地周辺地域への集中を確認した。これは、土器を倒置する埋葬場所を屋内とするか、屋外墓坑内とするかという選択が行われたとすれば、それは武蔵野台地周辺に限定された事象であることを意味する。他地域でも２つの墓制が併存した可能性もあるものの、これ以上の検討は不可能である。

従来の墓坑内倒置土器の研究は、墓制の一環としての研究に偏っており、土器の打ち欠き部位などが注目されたものの、使用する土器様式などの分析は未着手であった。この時期の武蔵野台地は山梨系（曽利式）、東関東系(加曽利 E 式)、東北系（大木式）、在地系（連弧文）などが併用されており、倒置土器として利用する土器の様式に注目すると、特定様式への集中化が認められた。単純に出自を示すとは解釈できないので、今後屋内埋甕への利用状況などを含めて検討が必要である（『季刊考古学』）。

（３）屋内倒置土器の検討

以上をふまえ、屋内倒置土器の検討を行った。主な分析項目は、利用する土器の様式、屋内での設置位置である。

前者については、現状では墓坑内倒置土器と比較するための東京都に限定したもののみだが、事例数ピークの時期差とともに、使用する土器様式の差異も明らかになったことから、両者の性格の差を指摘し得る。
（日本考古学協会発表・右上図参照）



倒置土器の位置については、廃屋墓の頭骨の位置と合わせて分析した結果、ともに柱脇の事例が多いことが判明し、倒置土器＝廃屋墓説に優位な結論を得た。(『21 世紀考古学の現在』)

但し、さらに検討を有するため、現在分析を継続し、研究の総括とすべく査読論文としての投稿を予定している。

(4)出土状況記録の重要性の提起

以上の分析の基礎資料は、資料が遺跡の中でどのように出土したかという記録であるが、出土位置や向きなどの詳細な記録が残された発掘事例は多くはない。本研究期間中、いくつかの一般向け・地域の埋蔵文化財関係者向けの講演などを依頼されたが、そうした機会においては、本研究の成果とともに、出土状況の記録の重要性を強く強調した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

中村耕作 2016 廃屋墓における葬送儀礼の諸行為－縄文時代中期・後期の東京湾岸地域の事例－『國學院大學栃木短期大学　日本文化研究』1　pp.49-76（査読無し）

中村耕作 2015「縄文人のお供え物－沖ノ原遺跡のクッキー状炭化物をめぐって－」『津南学』4　pp．271-295（査読無し）

中村耕作 2015「土器被覆葬にみる社会関係－中期後半の南関東の事例分析－」『季刊考古学』130 pp.82-84（査読無し）

中村耕作 2015「2014 年の縄文時代学界動向土器編年研究　晩期」『縄文時代』26　pp.199-201（査読無し）

中村耕作 2014「縄文時代後期における異形土器・特殊器種の出現と相互関係の研究」『高梨学術奨励基金年報　平成 25 年度研究成果

概要報告』pp.24-29（査読無し）

中村耕作 2014「身体表現を持った土器とその考古学的課題－小野良弘氏所蔵の顔面把手・動物形象突起・顔面付土版を例に－」『國學院大學学術資料センター研究報告』第 30 輯　pp.15-26（査読無し）

〔学会発表〕（計６件）
中村耕作「死者の身体と装い」平成 27 年度神奈川県考古学会講座　縄文時代の装い 2016 年 2 月 21 日　横浜市歴史博物館（神奈川県横浜市）

中村耕作「縄文土器にみられる象徴的思考」第 9 回山梨県埋蔵文化財センターシンポジウム　土器から読む縄文世界　山梨県恩賜林記念館（山梨県甲府市）2015 年 11 月 22 日
https://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/sinpo-ziumu/documents/kouen3-nakamura.pdf

中村耕作「死者に供えられた土器」十日町市博物館講演会　十日町市博物館（新潟県十日町市）2015 年 10 月 24 日

中村耕作「縄文時代中期における住居床面／墓坑内の倒置土器」日本考古学協会第 81 回総会　帝京大学（東京都八王子市）2015 年 5 月 24 日
http://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=85294

中村耕作「縄文人のお供え物－沖ノ原遺跡のクッキー状炭化物をめぐって－」平成 26 年度秋季津南学講座 第２回　津南町農と縄文の体験実習館なじょもん（新潟県津南町）2014 年 11 月 29 日

中村耕作「相模大山山頂遺跡出土縄文土器の再検討」日本考古学協会第 79 回総会研究発表　駒澤大学（東京都世田谷区）2013 年 5 月 26 日

〔図書〕（計６件）
中村耕作 2017（予定）「柱脇の倒置土器」『山本暉久先生古稀記念　21 世紀考古学の現在』六一書房（未刊）

川崎義雄・中村耕作ほか 2016『東京都調布市史跡下布田遺跡　第２・３・７・８地点』調布市教育委員会　全 288 頁
(担当:全体編集・縄文土器)

中村耕作 2015「縄文土器にみられる象徴的思考」『第 9 回山梨県埋蔵文化財センターシンポジウム　土器から読む縄文世界 資料集』pp.14-17

中村耕作 2015「死者に供えられた土器」『平成 27 年度秋季企画展　縄文後期の墓　栗ノ木田遺跡－縄文人の死と弔い－』pp.17-20

中村耕作 2014「釣手土器を追う」『フィールド科学への入口　遺跡・遺物の語りを探る』玉川大学出版部　pp.113-152

中村耕作 2013「埋葬とアノ世」「縄文人の道具箱」「第二の道具」『別冊太陽』日本のこころ 212(縄文の力)　pp.74-76、78-85、118-128

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
ホームページ等
http://researchmap.jp/kousaku-n/ 科研研究

６．研究組織
(1)研究代表者
中村耕作（NAKAMURA, Kousaku）
國學院大學栃木短期大学・日本文化学科・専任講師
研究者番号：３０５４８３９２

(2)研究協力者
大網信良（OOAMI, Shinryo）
大日方一郎（OBINATA, Ichiro）
佐藤拓也（SATO, Takuya）
入江直毅（IRIE, Naoki）